

---

## 19世紀のアルハンブラ宮殿 —ラファエル・コントレラスによる修復とその背景—

---

佐藤紗良（大阪大学）

---

アルハンブラ宮殿(以下アルハンブラ)は南スペイン、グラナダの、イスラム様式を基本とした宮殿建築である。かつて全盛を誇ったイスラム王朝芸術の結晶だったが、15世紀のレコンキスタ以降キリスト教徒に支配されるようになった。その後宮殿自体の美しさを保持したまま修復や改築によるヨーロッパ的要素との融合が図られ、ヨーロッパにおけるイスラム芸術の最後の華という地位を確立するに至った。ではイスラム的要素はどのように保たれ、変化してきたのか。本研究は19世紀のアルハンブラの修復家であるラファエル・コントレラス(Rafael Contreras, 1824-1890)に焦点を当て、その修復の歴史的かつ思想的背景を検討することを目的とする。

イスラム庭園の発祥はササン朝ペルシアであるとされる。イスラム圏において水を贅沢に使い、かつ四方を壁で囲んだ外敵から防御された庭園は一種のステータスの象徴であり、コーランの楽園を具現化しているとされてきた。またイスラム庭園の典型として、四つの水路や舗道によって庭園を四分分割する「四分庭園」がある。その形式は現在のアルハンブラにも当てはまるが、それらが当初から不変のものであったのかということとはどの資料からも伺い知ることができない。

19世紀の修復家であるコントレラスは、1847年に「装飾の修復者」としてアルハンブラで作業を開始した。彼は装飾の修復にとどまらず、アルハンブラの建築を当時イスラム建築と信じられていた形に修復していった。その最たるものが1859年、アルハンブラの中でも極めて高く評価されるライオンのパティオの東屋の三角屋根を丸屋根に変更した修復である。1878年の著書の中で彼は、理想的なイスラム建築には丸屋根が相応しいとした上で、ライオンのパティオの丸屋根を自ら高く評価した。

この修復は当時の修復家の姿勢や、台頭しつつあった修復方法の概念と深くかかわっていると考えられる。その概念はフランスの建築家、ウジェーヌ・エマニュエル・ヴィオレール＝デュック(Eugène Emmanuel Viollet le-Duc, 1814-1879)によって提唱されたものであった。それは「たとえそれ以前の建築様式と異なっていたとしても、建築として完全に調和がとれた形に修復する」という考え方で、コントレラスによる丸屋根への改造とアルハンブラの修復は、その代表的な一例なのである。

16世紀から18世紀まではほぼ見捨てられた廃墟であったアルハンブラは、その怪しげなまでに退廃的な美と歴史的価値を認められ、世界的注目を浴びようになる。その後アメリカの作家ワシントン・アーヴィング(Washington Irving, 1783-1859)が1831年に書き上げた『アルハンブラ物語』によって、それまで荒廃していたアルハンブラに目が向けられるようになり、中世のロマンに溢れた異国情緒は人々の幻想と旅情を掻き立てた。そしてコントレラスによる修復が更にイスラム的スタイルを強め、その熱に拍車をかけたのである。彼の修復に批判の目が向けられるようになるのは、20世紀になってからのことである。